

(48) 元木靖 「開田・減反政策への対応からみた北上盆地西部

山麓地域の農業の変容過程」 日本地理学会予稿集 三

(一九七二) 二二二～二三頁

(49) 元木靖 「米の生産調整下の戦後開田地域」 埼玉大学紀

要 社会科学編 二四 (一九七六) 七一～一〇三頁

(50) 元木靖 「霞ヶ浦湖岸低地の蓮根栽培」 日本地理学会予

稿集 一二 (一九七七) 二二八～二二九頁

(51) 最近、地域性を重視した農業生産活動の自主的振興が、主

として政策レベルの問題としてクローズアップされてきた。

そのため、振興計画の単位空間としての「地域」に対する

関心が、農業経営経済学と農政の両面で急速に高まってい

る。なお農業サイドの「地域」および「地域農業」論につ

いては、農業と経済(一九七六―一〇・一一)ならびに農

業富民(一九七六―一〇)の特集と前掲註(42) 一～二頁

を参照されたい。

(52) 一九七六年日本地理学会秋季大会シンポジウム「東日本の

果樹農業地域」報告 地理学評論 五〇巻三号 一五一頁

〔書評〕

渡辺久雄著 木地師の世界

——個人と集団の谷間——

—

本書は三部に分れる。第Ⅰ部では「個人と集団」として、一、繩張り 二、スクール・コミュニティ 三、郷土史家たち―個人の価値の題のもとに、著者の見聞や体験を通して注目すべき問題点が語られている。たとえば繩張りの項目では霧社事件を事例として異文化を理解することの困難さが、スクール・コミュニティでは山村の小集団の中に入り込んだよそ者としての調査団の立場が、また、郷土史家たちについては郷土資料の保存の仕方や共同調査のあり方が、考えるべき一端として、しかもことごとしい議論としてでなく、さりとしたエッセイとして記されている。第Ⅱ部は「職能集団」として、四、行商繁昌記 五、杜氏と檜皮師が述べられている。ここではじめてそれまでの定着社会としてのムラ(農民生活共同体)とのかかわりにおける移動生活者の立場が考えられる。行商は現代的形態のうちに人間関係のつながりが活きている姿をえがき、杜氏や檜皮師たちでは前近代的移動生活の近代化の過程を追っている。その中で注目すべきは、著者が農民のみが兼業という言葉で呼ばれ、その他の職業―たとえば会社社員―に従う者が株や穀物の取引で収入を得ても、これを兼業といわないのは何故かと問うていることである。

これは実は、われわれ全体がまだ農を職業というよりは生業と感じ、これが人間本来のあり方と考えているからであって、日本が工業国になっても日本人の心持が農民から脱皮していかないからなのである。そこに本書が取扱う集団が実は農民的集団であり、個人は、それとは異なる意識に立つ職業人の中から育ってくるというちがいがあるのである。第Ⅱ部に取り扱われている職能集団とは、そのような過程に出現するものといえよう。

そうして第Ⅲ部木地師の一生では、六、木師墓—ブローグ、七、あるき筋—日本のジブシー 八、山びと仲間 九、研究事始 一〇、ロマンと現実—平家部落伝承と椀久物語 一一、木地師の暮らしが取められ、本書の中核をなしている。ページ数からいっても本書の半分を占め、取扱われている内容も前の二部門にくらべて、かなり密度が高く議論の方式も文献を引用して学術的になる。しかし、決して読みにくいとか肩がこるといったものではない。著者の本論についての態度は、まず、木地師にはこれまでかなり研究が進められているが、その起源の探究をいうよりも、これを職とする集団が形成された過程をとらえてゆくことに意義があるとする。もともと木工品としての容器類は弥生時代以前からあって、木工品の発生を論ずることは道具の歴史を辿ることになる。それは著者の研究課題ではないということになるからである。

しかも、著者が、杉本壽教授のような研究者があり、各地の地方史家の中でも注目されつつある木地師にとりくんだ意義は、それらの研究が主として歴史的な過程を中心として来たのに対して、地理学的に木地師たちの歩みを、環境とのかかわりあいから明らかにし

ようとする点に認められる。そこで著者がとった方法は、とりわけ生態学的手法であった。すなわち、数万にのぼる木地師個々の—もちろんその家族を代表し、その背景をもつ個人の—記録をカードにとり、それを土地とのかかわりにおいて捉えようという方法である。これは労多い廻り道のようにみえるが、しかも一旦個々人の動きがはっきりすれば、それらが集団としてどのような存在であったかが、鏡にうつるようになり明らかになってくる。全体としては複雑でよくわからないものを、部分に分解して明らかにしてゆく方法として基本的なものといえよう。これは京大の伝統であるといってもよいかもしれぬ。かの霊長類研究—ニホンザルを代表とする—にみられる個体識別法と同様の発想であり、それは巻頭のナワバリという言葉にも既に感じられるのである。また、序文にみられる植物と土壌との関係のアナロジーとして個人と集団とのかかわりあいを考えようとする著者の態度にもうかがわれる。

いうまでもなく、このような発想としての生態学的立場のみでなく、具体的知識としての植物生態学的な知識成果も利用されている。たとえば、兵庫県植生図によって木地師居住地を記入してみると、(一六三頁)にみられるようにその位置はブナ—ミズナラ林と密接に関係している。それは彼等の作成した木地の多くが、この樹種を材料としたからであって、これらが一般の建築用材として利用されないことが、彼等の山中行動を自由にさせた一因であることを指摘している。また、同じ木地師の一家がある周期でもとの居住地に帰していることを見出し、その周期がほぼ三〇—四〇年となっている点で、これら材料樹種の再生が可能であったからであろうと推定

しているなどがそれである。そうして、これら原木が伐りつくされて二次林化した土地から、しだいに定着して農民化してゆく過程がみられると論じている。歴史地理学における植物生態の知識が、有効に活用されている好例を提供したものとええよう。こうした点が歴史学のみの方からのアプローチとは異なる独自性として意義深い地理学的研究のあり方といえる。

二

著者の用いた基本資料は近江の小椋村にあった氏子駈の帳簿、つまり氏神に対する奉賀金の全国的集金簿である。これは同時に登録木地師数をも示す。その数は延五万九千余人となっている。時期は正保から明治にわたる約二四〇年間で、集金の間隔は二、三年から二十数年と不定期である。これではあまり人も地域もぼろ大だからであろう。著者はまず調査区域を中国山地に限り、そこで寺院の過去帳や地方文書、あるいは藩の記録などをこの基本資料と対照しながら作業を進めたわけである。

まず、事の順序として木地師の概念から説明がはじめられる。著者と木地師なるものとの出会い、それは研究動機として後学の者の参考となる話だから、こうした書物では是非ふれていただかねばなるまい。次に、木地師が漂泊者の一つとして、ジブシーと対比される。それを著者は、「歴史的にふりかえてみると、類似のものがありそうである。つまり漂泊民という分類の中に入りそうな一団がある。民俗学上でいう『あるき筋』がこれである。これは行者・山伏・聖・毛坊主・御師・巫女・比久尼（比丘尼と書くのが普通）から、遊女・猿回し・人形回し・万歳などと広範囲に及び、タタラ師

（鉦山師）、マタギ、サンカ、博労から、杜氏や木地師をも含めている。要するに移動生活をする者をすべて『あるき筋』と呼んでいるわけである。」と書く。

この点では、評者は多少の異議を申立てたい。少くも木地師の記録が出てくる近世においては、これらの職に従うものの大半は既に一定の居所をもっており、その生活のある期間を出稼ぎするにすぎなかった。一家をあげて居住地を移動してゆくのは、サンカと木地師、それに若干のタタラ仲間―ことに鑄物師―くらいではなかったろうか。反面、農民の中にも短期間ではあるが、信仰的な回国や順拝行為がみられ、その境目ははっきりとはつけにくいものがあった。だから民俗学では、少くも学術用語として「あるき筋」という言葉は用いられていない。一、二の研究者が用いることはあろうが、学界に定着した言葉とはいえないのである。もし用いている人があるとすれば、それはスジという言葉で出自系譜の問題にするジャーナリズムに多い問題意識からではあるまいか。こういう表現はともすると差別としてやかましい問題になりがちだから、使用上注意される方が学問研究上はよいと思う。

もちろん、この種の、農民という定着者に対立する社会の全般を意味する言葉がないのは不便であり、学術的にも必要であると思う。しかしながら、さきに指摘したような、農こそ生業であり、土地をもつことこそ社会における完全な人間の資格であるという日本人の意識が、牢固として抜きがたいものである限り、それと対立する移動生活者は劣等者であり、一段低級な社会人であるという気持も、どこかしらに存在する。だから彼等の境涯を漂泊といたいたいかに

たよりないものとしてえがき、これを軽んずる。それが学者などに對してすら見受けられるので、一生を一つの大学で送る人が尊敬されるなどという、世界の大学人から見れば珍らしい現象が、日本では当然のように考えられているのである。このような社会の中では、土地なきクラスを総括する名称が、すぐ特定の社会集団のイメージを帯びて、差別語化することはさげがたい。その点は何よりも著者自身がよく御存知であろうと思う。

さて、筆がそれだ。いま一つ、評者が印象に残る言葉は、木地師といわれる人の中には、轆轤を廻す轆轤工と木地を作成する木工との二種があるが、前者は帰化した技術者の末であり、それが過剰となって都から流れ出て、山中の木地師となったという前提に立つておられることである。たしかに轆轤の技術と工具とは中国からの伝来であろうが、それが都が衰えて地方に流寓するまで、地方住民には木工技術はないも同然だったのであるか。「延喜式」に太宰府が大中小の盤多数を貢することになっていたのは、既に木製の盆を作る技術が九州方面でかなり広く知られていたことを示すように思われる。本来京師に宮廷中心で行われたものが、後に民間に普及したという場合は確かに多いが、それまで民間にはその技術や行為は存在しなかったという見方は、中国伝来の風習が来るまで民間には行事がなかったという考え方に近く、旧文化の中心であった近畿に生活する人びとにとっては当然の前提かもしれないが、東国の住民にはいささか抵抗が感じられるのである。民間における発生しないし需要がより高い文化の刺激によって、より高度のものに形成されるという場合もあり得るのではなからうか。登呂その他の地方の木器

類の発掘品をみても、このことは考えられるように思う。

ところで、一般的な木地師についての道具と知識は、杉本教授が詳細に研究した成果、並に重要民俗資料に指定されている各地の木地製作用具、文化庁編「木地師の習俗」などを参照されれば、まず申し分ないから、読者には本書やそれらを参照していただくことにして、著者の鋭い観察眼にふれた二、三の新しい知識について紹介しておきたい。一〇の「ロマンと現実」でふれられる平家落人伝説のある山村と木地師集落との関係がその一つである。全国に一三三もあるという落人村のいくつかを、中国山地について調査されるうちに、その幾つかについて、本来は木地師開発の伝承であったものが、貴種流寓譚と付会して平家の落武者を祖とするという話が創作されていったもののあることが、記録文書との対照分析によって明らかにしたのである。たとえば、落武者の墓と伝えられるものの多くが、宝篋印塔であり、これが実は供養塔であって埋葬墓ではないことがその一つである。それらの例が鳥取県三朝町中津、若桜町落折、郡家町姫路などによって示されている。もちろん、中国山地の木地師集落は六五一もあり、平家落人村伝説のあるものは二〇であるから、そのすべてを木地師集落の変身と考えているわけではないと、著者はことわっている。しかしながら、両者の間にかかわりがあり、少くも伝承の上での相互乗入れが認められることは確かである。

さらに、これまでの木地師研究が多く民俗学や歴史学の側からみて、生産者である山中の木地師に片寄っていたのに対し、著者は流通面に着眼して加工木地師としての塗師と販売木地師である盆椀膳

類の問題にも注目し、これらの組織として全木地師集団をながめようとしている。もっとも塗師や問屋についての考察はまだ予備的段階に止まっているけれども、輪島漆器の特異な行商による注文生産取引の形態などを中間において考えてみると、これらは日本の工業—商業組織の発達の一類型として、極めて興味ある歴史地理学的研究を展開させうる可能性をもつように思われる。評者はかつて「いわゆる裏日本の形成について」と題して、この点を追求しようとしたことがあった。その試みは未完成に終わったけれども、著者の計画は壮大であって、公式的な資本主義の発展段階論に対して、地域的な立場からの新風を吹きこむことにはなかなるのではなからうか。今後が期待されるのである。たとえば、生産—加工—流通の組織化が大坂あるいは京都における問屋商人たちによってなされたのではなく、近江山中の神官僧侶集団によって行われて来たという点などは、経済史的にみて興味深いところである。それは著者のいう地理的環境とのかかりからみて、どのように説明されるであろうか。

三

著者のユニークな視点の一つに、木地師家族のライフサイクルの探究がある。少数ではあるが過去帳の記載と対照して、家族が早婚でないこと、単家族で外婚制をとったこと、二、三家族から成る仲間組織が閉鎖的でなく、相互に流動的な点であったかも狩猟民などにみられるバンド的色彩を帯びたものであり、これによって血族婚の弊に陥らぬようにしていたことなどを述べている。しかし、飢饉にはもろく、家族の死滅する者が多かったらしい。この点は木曾谷の木工業者たちが天保の凶作で過半離散消滅した例もあり、確かなこ

とである。そうして、彼等の定住農民化の進行の一つの原因には、近世後期に頻発した冷害凶荒があったのではあるまいか。この点は著者がまだ論じていないところであるが、やがて明らかになることと思う。乳幼児期に死亡する者の多かったことも、過去帳から集計分析しておられるので評者としては大いに参考になった。

本書のエピローグは、IVとしてフィールドワークと地方史と題され、地理学研究が地方史・地域史に貢献しうる理由を論じている。

著者の体験として、現実のフィールドには人と物とが結びついて、あるがままの世界が展開している。そのような形で人の歴史はそれをめぐる自然環境とかわわっているという。だから、そこに立ってその土地に対する観察を示すことで、地理学はその他の歴史学・考古学・動植物学・地質学等々の研究の間の充填物、連結物としての役割を果たすことができるのだ、と著者は主張し、地理学が専門諸学に分解されえない理由を述べているのである。

それでは、著者がサブタイトルとして記した「個人と集団の谷間」として木地師の世界をとりあげた意図はどこにあるのか。私ははじめに一読したときそれがどうしてもわからなかった。序文にはこうある。「ふと社会とは何ぞやという素朴な疑問を抱いた。個人が先なのか、それとも集団が先なのか。生物である限り個では生きられない。全体との調和が必要である。といって信念なき個の集りでは一向に実りも進歩もない。」、そういって、個人が集団の中ではじめて生かされるという事例として、集団組織と個人の一生とを対比するために木地師という特別の社会を例として述べたわけである。

著者が明言していないために、評者は再読してやっとわかったこ

とだが、山中に孤立したホルドにある木地師たちが、少くも近世を通じて流通機構としての問屋と結んでいたところに、彼等の個々の生活は保証され、漂泊は必ずしも心細いものでなかったという関係があるのではなからうか。そうした組織の意義を感じていたからこそ、氏子駆で奉賀金を集めに来る見ず知らずの者に、かなりの金額を差出すわけであったのであろう。その組織の中でこそ木地師たちは各地の山中で自由に木材を得ることができたのである。これには評者の誤解もあるかと思うが、改めて著者の教示を得たいところである。

何度もいうように本書は決して学術書ではない。その証拠には文献の典拠も示されず、索引も付けられていない。記述も一般向けの読みやすい表現をとっている。しかし、著者の意をくむことが困難なほどざらりと書き流されながら、内容にはかなり高度なことが盛り込まれており、思想として、方法論として多くの有益な言葉がちりばめられている。歴史地理学界の指導的立場にある方の、簡潔なエッセイとして、多くの若い方々に御すめしむたい書物である。もちろん筆者などにとっても、頂門の一針となった個所は少くない。先輩に対し非礼の言、意のくみとれなかつた点の多々あることをお詫びして筆を置く。

B 6 刊 二〇二頁 創元社 一九七七年二月発行

一一二〇〇円

(千葉徳爾・筑波大学)

〔第二一回大会の報告〕

研究発表

北関東農村荒廃と浄土真宗移民によるその復興

小野寺 淳

(要旨)

関山直太郎によって、近世における農民移植政策として取りあげられた浄土真宗移民について、移植ではなく浄土真宗農民の主体的な移住として把握し、北陸地方出身の多くの浄土真宗農民が、北関東農村にどのように定着していったのかを明らかにすることが、今回の研究の目的である。その方法は、まず北関東における浄土真宗移民の移住村落の分布図を、先学の研究成果から、またその疑問点は再調査をして作製し、その共通点を見い出そうとした。その上で、移住村落のひとつを取り上げ、その村落の荒廃現象を分析することによって移住村落の特色を示す。そして、その荒廃村落内部における浄土真宗移民の土地集積を検討し、浄土真宗移民がどのように定着していったのかを理解しようと考えたのである。

対象とした移住村落は、旗本宇津家桜町領四千石（現在、栃木県芳賀郡二宮町物部地区横田・物井と真岡市東沼）とした。この桜町領の荒廃を分析する際の資料は、地元古文書があまり残されていないこともあって、『二宮尊徳全集』第十一十三巻（桜町仕法）をおもに利用した。また、浄土真宗移民の移住形態を知るために、真